

ゲゲゲのげ

渡辺えり子



著者略歴
舞台芸術学院25期卒業
劇団「300」主宰
「ゲゲゲのげ」で第27回岸田国士
戯曲賞受賞
主要作品
「夢坂下って雨が降る」
「タ・イ・ム」

ゲゲゲのげ

定価 一三〇〇円

一九八三年七月三〇日印刷
一九八三年八月一〇日発行

著者 © 渡辺 えり 子

発行者 高 橋 孝 子

印刷者 山 岸 真 純

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部 〇三(五)七八一一
編集部 〇三(五)七八二一
振替 東京 九一三三二三八
郵便番号 一〇一

三秀舎印刷・黒岩製本

(分) 0093 (製) 54250 (出) 6911

渡辺えり子

ゲゲゲのげ

——逢魔が時に揺れるブランコ——

白水社

装幀 上野紀子

ゲゲゲのげー逢魔が時に揺れるブランコー

登場人物

月渡マキオ

海谷時彦（鬼太郎）（鬼太郎の父）

若月源二

塩原千太

鳥湖朔子（老女・一葉）（河童）

柳田基子（母）（砂かけ婆・子泣きじい・いったんもめん）

多田七恵（姉）（山童）（ろくろっ首）

堀川真弓（妹）（河童）

神保静子（妹）（河童）

真中康夫（ねずみ男）

佐藤裕一（佐藤杉）

八雲山三（河童）

梶本潤也（河童）

近藤俊美（河童）

月渡日出代（股くぐり）

他 見越入道

野ブスマ

耳なし豚

今はない、古代ギリシアの器の割れる音がする。——今はない、しかしかつての人々が、ある種の痛みとともに聞いたであろう、あの音である。確かに聞いたはずなのに今はない、なんとしたことだ、今あると思っているものが瞬時に過ぎていくとは。それならば頭をこらして聞くしかない。すると今はないあの音は、またたくまに聞こえてくるのである。——

と、地の底より風の音。

逆立ちした木立ちの群が、風に揺れてでもいるかのような、冷んやりと暗く、そう地下の魂が騒ぐ音に似ている。

地が熟し、星を孕む、それを見守るように木々が囲み、時を待つ。星は生まれ、空を目指した。

〈音楽〉「レントより遅く」聞こゆ。

逢魔が時に生まれた星は

熱い魔境を直指す星

砂漠の底の魚の群も

やせた大地に揺れる果樹園も

そんな星を待っているのさ

だから俺は行く、俺は行く

ああ、あちらから、こちらから
魔境、魔境と風が吹く

たそがれ時、木々の気配のする舞台中央白々と明るくなると白いベッドに眠っているやせた女の顔が見える。その顔は土気色でまるで生気がない病人のそれである。もっと明るくなると、そのベッドを取り囲む四人の女の顔が見える。皆ひざまづいて、ベッドの女の顔をのぞき込んでゐる。中央の老いた女のさみし気な顔色とは反対に四人ともひどく血色がいい。女達のヒソヒソ声、徐々にハッキリと聞こえ出す。

真弓（小声で）来年の夏休みにはどこかへ行けるかな。

静子 どこかって、どこ？

真弓 海かな、山でもいいけどさ。みんな行くじゃないのよ、夏は。

静子 じゃあ、海ね、山なら冬だっていいもの。

真弓 どうして？

静子 山はやっぱリスキーでしょ。

真弓 夏山スキーっていうのもあるわよ。

静子 海で泳げるのは夏しかないっていつてるのよ。

真弓 寒中水泳はどうなるの？

静子 ちよっと。

真弓 生活の為に季節をとわず海にもぐる人達は？ 海女さん、だっけ？

静子 じゃあ、あんた漁村に嫁いで毎日もぐってりやいいじゃないの。

真弓 だめよ。去年ギックリ腰になってから、冷やしちゃだめだって言われてんだから。

静子 じゃあ、海水浴なんてどうせ行けないんじゃないの。

真弓 行けるわよ。泳がなきゃいいんだから。

静子 意味ないわよそんなの。

真弓 あるわよ。焼けりゃいいんだから焼けりゃ。

静子 山だって焼けるわよ、焼くだけなら。

真弓 夏は海です。

静子 さっきからそう言ってるじゃないの。

真弓 うそよ。あたしが海って言ったのよ。

静子 ……こうなったら、私は山だわ。絶対、山よ。あんたの後ろから登ってて崖から突き落としてやる。

真弓 だめよ静子ちゃん、そんなに顔近付けちゃ。

静子 やだ真弓ちゃんだって、さっきさわったじゃないの。あたしちゃんと見てたんだから。

真弓 嘘よ。あんたなんでそんな嘘付くの。

静子 嘘じゃないもの、見てたもの。

七恵 静かになさい。

静子 だって真弓ちゃんが。

真弓 嘘よ！

七恵 あんたたちどうしていつもそう……。

と、母、いきなり女の頬をぶつ。女は目を開けて眠ったまま。
間。

三人 母さん！

七恵 あのを……。

母 (静かに、決心したような顔になって) ……海にしましょう。

三人 えっ？

母 母さん、どこまでも泳げるのよ。遠泳よ、泳いで泳いで、泳いでいると、このままフランスまでも泳いで行けるような気がするの。永遠にどこまでもね、永遠に、遠泳で、どこかに必ずあるだろう永遠の向こう岸まで母さん泳いで行きたいなあ……ふふふ。そうか遠泳は永遠の大いなるゴロ合わせになってるのか、ふふふ来年は、ね、来年こそは行きましょう。海に……。

七恵 でも、あたし達はちっとも泳げないのよ。あたし達を置いてけぼりにして、母さんだけ一人で

向こう岸に行っちゃう気？

母 教えてあげるわよ。あたしだって昔は、カナヅチだったんだから。

静子（驚いて） 母さんてカナヅチだったの？

母 そうよ。

真弓、静子、母をジロジロ見る。

真弓・静子 どう見ても人間だわ。

母・七恵 えっ？

真弓 いつから人間に？

母・七恵 ああ？

真弓 父さんもカナヅチなの？

母 父さんは今でもカナヅチのはずだけど。

真弓 ちょっとまって、ということは、あたし達も。

七恵 カナヅチだって言ってるでしょう。

真弓 どうしよう静子ちゃん。

静子 そういえば昨日から頭が重いと思ってたのよ。ただの風邪かと思ってたけど、カナヅチだったのねえ。

真弓 あたし、大工さんとお見合いしよう。

母、また女をぶつ。

三人 母さん！

七恵 あう。

母 いいのよ別に……何をしたって、ここにこうして、この子がいる事には変わりがないし、かといつて、こうでもしなけりや、この子を忘れてしまひそうな氣もするしで。母さん、ちよつと、イライラしちゃつて。

七恵 母さんたら、いつだつてこの子の事忘れたことなんかなくせに。(一同、じつと女の顔を見る) あたし思うんだけど、ほら、よくクラスの中で、いっつもだまつて人っているでしょ、何でも判つたような顔してさ。皆で集まつて人の悪口なんかで弾んでても、ちつとも乗つてこないでさあ、一人でじつとこつちを見てる人つて。

真弓・静子 いるいる。

七恵 なんか頭良さそうに見えるじゃない？ なんかとてつもない事を考へてゐみたいでさ。

真弓・静子 うんうん。

七恵 それで皆で、いちもく置いて御愛想笑ひかなんかで、氣い使つて、後になつて話してみると、何にも考へてなくてさ、まるでバカなの。

真弓・静子 いるいる。

真弓 ガックリきちやうのよね。

静子 喋る事ないから喋らないだけなのよねえ。

真弓 そうそう。

七恵 そんなものなのよ、ね、母さん、この子だって、こんな風に待ってみたいところだね、結局同じような気がするの。口を開いたとしたって、何にも変わるもんじやないようなね。

母 でもね、七恵。

七恵 母さんて、何か大きな事を期待してない？ あたし達にない、何か大きな事をこの子に。

母 そんな、母さんはただ人並みな事を考えてるだけよ。

七恵 じゃあいいじやないの。私達は人並みなんだから。

母 でも、この子は。

七恵 そうよ、この子は特別なよね、この子だけ、何でもかんでも手に入れて、まるでお姫様気取りなんだから。

母 そりゃ人並みでない分を人並みにカバーしようとしてるだけです。おまえ、こんな気の毒な人間にシットするつもりかい？

七恵 するわよ人並みに。だってこの子は知っているんだわ、わがままなのよこの子は。とるに足らない細かな事にひどくこだわっているだけに違う。私たちが血を流しながら我慢しているもの

を我慢しきれずにこうしてだだをこねているんだわ。私達の人並みな夢もなにかも犠牲にして。飛びもしない、堕ちもしない、ただ醜悪な天使。あたしたちにはなにももたらさない。ただ夢だけの天使、嫌だわ、もう。

母、ため息をつく。

真弓 ただ夢だけの天使……。

静子 飛びもしない、堕ちもしない。

七恵 ねえ母さん、向こう岸に、大いなるゴロ合わせの向こう岸にこの子の夢があるとしたら、それを私達も見ることができのかしら。私達が起きている間は、向こう岸にいるこの子が、私達が眠っている間に、こちら岸まで泳いできているのだったら私達は眠りまでも犠牲にしてこの子を見はつてなくちゃならないのかしら。

真弓 七恵姉さんさっき言ったでしょ？ もう嫌だつて。

静子 そうよ、もう嫌なのよ。

母 ……泳げるかしら、母さんね考えてみたら、もう三十年も泳いでなかった……あんなにスイスイ泳げたのにね……でも、自転車と同じで、一度覚えると、なにがあっても大丈夫だって誰かが言っていたものね、泳げるよね、また……行こうね、来年はみんな……この子も……。

七恵 母さん、もう押しやりましょう、この子の事は放っておきましょう、この閉ざされた春の部屋

の中に忘れてしましましょう、ギーツボタン！

四人 ギーツボタン！

きつい花の香。

女の顔を残して暗くなる。女、明りが消える前にひとこと「マ……キ……オ……」とつぶやいたようだ。

木々がざわめく気配がする。その気配の中、遠くでカンテラの明りが揺れる。明りが近づく
とさっきの女の居た場所で止まる。

明るくなると、カンテラを持った男、土の匂いを嗅ぎ、それを少々擱んでなめ、味をみたりして、地面に耳を当てる。その後ろには小さな少年がぴったりとくっついてる。

男 んん……。

少年 おじさん、何してるの？

男 おや、塩原君、どうしたんだい？

少年 何言ってるのさ、さっきから一緒だったじゃないか。

男 そう？

少年 ここに何か埋まってるの？

男 そりゃ、土の中には必ず何かは埋まってるさ。土は初めから土なのではなく、何かが腐って土な

のだからね。動物の糞とか葉っぱとか人間の骨だとかね。

少年 おじさんは毎日ここに来るね。

男 そりゃあ、やっと手に入れた大切な場所だからね。

少年 えっ？ だってここは森田の貫衛門さんの地所じゃないの？

男 先月やっとね、買えたんだよ。最初は没ってたじいさんもやっと折れてね。

少年 バカだなあおじさんは。よそもんだからって騙されたんだよ。ここは石ころだらけのやせた土地だって父ちゃん言ってたぞ。

男 いやいや、おじさんが手入れして、りっぱな地面をこさえてみせる。

少年 ずっと前にね、やっぱり東京から若い人が、この先の五郎沼から水を引いて田んぼにしようとしたらしいけど、失敗しちゃって借金かかえて夜逃げしたらしいぞ。知らないのおじさんだけだよ。

男 ああ、こっちの方が湿ってるのはそのせいかな。

少年 おじさん、お金かえしてもらった方がいいよ。

男 塩原君、皆知らないだけなんだよ。ここがどんなにいい土地か。あれは、七夕の頃だったかな、この林の向こうを通りかかった時、こちらの方で何かが燃えているのが見えたんだ。おじさんは山火事になったらこりや大変と急いで駆けつけた、するとどうだい燃えてるにや燃えてるんだが、ただ火の塊が空中で燃えて、こう止まってるんだ。おじさんはたまげて腰をぬかしちゃったよ。こりや、火の玉かも知れんと思って、あわてて口をおさえたよ。塩原君だって知ってるだろう、火の

玉が口の中から体内に入り込むと、その人間は死んじまうって話。しかしその怪し火はただその場所
所で燃えているだけでびくともしない。おかしいなと思って黙って見ていると、そのうちスーッと、
この、ちょうどこの当りに吸い込まれていってしまった。

少年　へえ。

男　この中にはね塩原君、きつと何かとてつもないエネルギーが封じ込まれているのさ。

少年　そうかおじさん、それが宝の火って奴だね。この前、公民館で村木田の右太さんが話してた。

男　そうかもしれない。

少年　でもおじさん、その宝を掘りあてるためにはその怪し火を見たことはだれにも言っちゃいけな
いって。そして三日三晩、裸で座禅を組んで、鉄やらアルミやら、自分の持つてる金物をみんなそ
の火の中に放り込まなくちゃいけないって。

男　ハハハ、塩原君、右太さんは大学で国文学をやっていたから、ああいう話が得意なんだよ。迷信
さ、あんなのは。おじさんがほしいのは宝は宝でも別な宝さ。

少年　別なって？

男　来年の春になれば君にも判るさ。

少年　だって……僕……。

男　そうか、塩原君は来年東京に帰るんだっけね。

少年　……うん……。